

生涯現役

木村 迪夫

今年の冬は、二十数年ぶりという豪雪に見舞われた。果樹の枝折れ・倒木は県域全体に未曾有の大被害をもたらした。

春先には、一転して連日高温の日々となった。稲作、果樹、野菜ともどもに成育は順調というものの、水不足でサクランボの果実は玉張りが悪く、小粒、小玉の結果に終始するのではあるまいか。例年ならば、6月の中旬から下旬にかけてが主力品種の佐藤錦のシーズンなのだが、今の時期（6月の初旬）にすでに、収穫期を迎えようとしている。

着果については、開花時期の4月下旬にかけては、好天つづきで、マメコバチの飛翔も良く、着果は昨年を大幅に上回ったようである。しかし果実そのものの出来が悪く、小粒小玉ではどう仕様もない。朝仕事、雨よけテントの被覆作業をしていた隣の園地のシズオさん、「あまりの小粒で、親戚に呉れてもやれないような、出来だなやえ」と、愚痴る。出荷販売実績としては、不作の昨年と変わらないのではあるまいか。

わが家の果樹栽培の主力品目の一つでもあるプラムは、何故か今年も昨年同様に着果が悪い。プラムのはしりの品種である大石早生などは、摘果もほどほど、ソルダムなどは、摘果の必要も無いほどである。農協の果樹組合のプラム部長を勤める当方にとっては、これでは張り合う力が湧いてこないというもの。

デラウエアは、今年も自給ほどの面積を栽培することにして、あとは休むことにした。胃の手術をして、ようやく2年目を迎えることができた。「3年は無理してはダメだぞ」という。家族、友人、親戚の忠告に従ってのことだ。妻は「デラウエアは、伐るべはあ」と、促す。「お父さんの体に無理かかるばかりだから」とも。

しかし、25年前、養蚕から果樹栽培に切り換え、名実ともに胸の張ることのできる自立農家を夢見て、新植に精を出したことを思い起こせば、痛恨のきわみである。病後の経過に期待しながら、いま一度、全面積の栽培

に戻りたいものと密かに思うこと、しきり。

それにしても、50年前、地元の農業高校を卒業し就農したころ、田圃は少なくとも1ヘクタール（1町歩）、畑地、園地も1ヘクタール以上の経営面積を有する農家をめざしたものだ。その頃のわが家の経営面積は、田圃が80アール、畑が50アールほどしかなかった。以来50年かかって少しずつ買いつけてきた。出稼ぎや、兼業などしなくとも、農業だけで生活の成り立つ農家を夢見てのことだった。

経営面積としては、田圃も、畑地、園地も、ともどもに目標を超えた。しかし世の中の状況は、大きく変化してしまった。1ヘクタールや2ヘクタールの田圃を持ったとて、どうにもならない世の中に変貌してしまった。加えて減反政策である。稲作の出来ない田圃など、想像もしたことは無かった。「晴耕雨読」の夢など、さらに遠退いてしまった。

現在私は、65歳、妻は63歳。農業後継者は居ない。まさにわが家も高齢者農業に加えられる年齢となってしまった。しかし先のことを考えない訳ではないが、「生涯現役」を自負し、さらなる先の夢を生きるのみである。

（山形県上市市・農業）

農業への新規参入

石川 玲

現在私は岩手県北上市で農業の勉強をしています。来年の4月には独立し、いよいよ農業で生計を立てる、という生活を営んでいく予定で準備を進めているところです。今から2年ほど前、それまで畑の土いじりさえほとんど経験のなかった私がこの地に来て、様々な体験をさせてもらいました。土作りや作物の作り方という基本的なものから、流通の仕組み、経営方法、そして地元や県内の方々との交流まで。1ターンによる新規就農は厳しいと繰り返し言われますが、同時に農家の方々を始め多くの方々の励ましと農協の多大

なる協力のもとに、今では大きな不安を抱えながらも将来の自分の姿が少しずつみえてきた、というところでしょうか。

出身は埼玉県浦和市（現さいたま市）、30代半ば、独身です。高校卒業後、約10年ほど島根県や埼玉県秩父郡という気軽に自然と触れ合うことの出来る場所で生活していましたが、今思えばこのときの経験が農業を志す基になっていると思います。5～6年前からは東京都内の地質コンサルタント会社に勤めていました。不況により会社が倒産すると同時に、それまで漠然としていた農業への憧れが具体化して「転職」を決意、仕事で何度か訪れたことがあり、その風景や風土が気に入っていた岩手県へ移住しました。

北上市農協では、農協自体が農業研修者を受け入れる事業を進めています。研修者は給料を貰いながら農協が用意した研修農場で日々農作業をおこない、また他に農業大学校等での研修を受けながら農業に関する知識を幅広く吸収し、農協が斡旋する農地で最終的に独立することが出来ます。私はその事業を最大限に利用して農業への道を歩もうと、北上市農協の門を叩きました。

実際に農協の研修者となり正解であったことはたくさんありますが、真っ先に挙げられる事はやはり地域の方々と交流できたことでしょうか。農協を通して農家の方々に紹介されることはもちろん、農協のイベント等にも積極的に参加することで「北上へ就農希望の青年がいる」ことを地元の方々に覚えてもらいました。今では相談事などでも農協の職員の方以外に若い農業者の方にお伺いすることが出来るなど、そのメリットはかなり大きかったと思います。また、就農する土地に関しても1ターン等では一番問題となるところですが、農協を通して土地を借りることでスムーズに解決することが出来ました。県内でも多くの新規就農者の方々が土地の問題ではかなり苦労した（している）という体験談を繰り返し聞いているので、この問題を解決出来たことは就農準備をするにあたり大きな前進となりました。その他にも、研修期間中は一定の収入があることで農業技術の習得に専念できること等、研修者であるメリットは多数

あります。

現在、ビニールハウスを利用した野菜と花卉の複合経営農家を目指しています。野菜は北上市農協の推進品目の一つである夏秋トマト、花卉ではやはり推進品目である秋出しパンジーを主体にストック等を考えています。ビニールハウスの周年利用のため、冬から春にかけても作物の栽培を考えていますが、労働力や収入の問題で理想的なものがなく、今のところ検討中です。

来年度には就農しますが、やはり最初は未熟者の域を出ません。少しでも諸先輩方に近づくために技術や知識の習得、情報収集に努力していかなければならないと思っています。農産物の出荷先も集荷施設を利用して大消費地に向けることになるでしょう。しかし、安い外国産野菜などが急増している現在では、流通面のコストなど価格競争力の低さに大きな不安があります。まだ漠然としてはいますが、将来的に大消費地へ出荷する主要品目の他に、産地直売所等を利用した地元消費者に向けての「安く」「安全」な作物の供給をおこない、徐々にそちらに重点を置いていきたいと考えています。

（岩手県北上市・農業）

負け戦の時のスタンス

福田 隆治

30年ぶりのホームグラウンド

2年前の50歳までは信用力のある「銀行員...」という名刺があり、若い時分から銀行員の立場で経営者の方々と商談することができた。人様から預かったお金で随分と貴重な経験をさせてもらった。バックボーンの銀行の信用があったからこそである。

バブル崩壊後、後ろ向きの仕事が嫌になったからリタイアした訳ではない。少々サラリーマンというか都会の暮らしに疲れたからである。定年帰農にはちょっと早いが、中年の新米百姓となった。名刺には「エコファー